

〈青森県史〉の窓

65



乾橋の渡り初め 1962(昭和37)年8月・白岩昭氏所蔵

新橋の向こうが旧橋。欄干が崩れ落ち危険な状態だったことがよくわかる。

江戸幕府は主要な河川への架橋を禁じていた。近代以降、各地で橋が架けられ、乾橋も1884(明治17)年に架橋される。明治期の橋はほとんどが木橋で、乾橋はほとんどが木橋で、乾橋

もその例にもれない。そのため老朽化に伴い、1929(昭和4)年12月に新装された。ところが、それ以降はほとんど修復されず、1950(昭和25)年頃には橋脚のコンクリートが脱落。欄干が32カ所も壊れていたというから驚きだ。このため1951(昭和26)年、壊れた欄干から視覚障害者が落下、即死するという痛ましい事故が起きた。

当時は自動車の本格的に普及する前で、馬車が重要な交通手段であった。そのため、馬車が重要な交通手段であった。そのため、馬車が重要な交通手段であった。

1957(昭和32)年8月18日、当時10歳の少年が、乾橋と自動車にはさまれて死亡する事故が起きた。欄干が壊れ馬糞がたまった乾橋に、今度は自動車の往来が新たな問題をもたらした。自動車の激増は橋の老朽化に拍車をかけた。

橋自体の許容重量は14トンなのに、13トンを超える大型トラックが通っていた。すでに橋は危険な状態を越えていたのである。

しかし、度重なる死亡事故と、高校生たちの地道で粘り強い奉仕活動が人心を動かした。まず五所川原商工会議所が市に陳情。市は県を通じて建設省(現国土

中国 裕

西北の生命線「乾橋」

(県民生活文化課 県史編さんグループ 主幹)

2(昭和27)年、高校生で組織された五所川原赤十字奉仕団の30人が週2回、馬糞を除去。赤い羽根街頭募金を実施して一部の欄干を修理した。翌日、欄干が心ない者に壊されたりしたが、彼らは熱心に奉仕活動続けた。

1957(昭和32)年8月18日、当時10歳の少年が、乾橋と自動車にはさまれて死亡する事故が起きた。欄干が壊れ馬糞がたまった乾橋に、今度は自動車の往来が新たな問題をもたらした。自動車の激増は橋の老朽化に拍車をかけた。

乾橋は西北津軽郡の生命線だ。その後、南側に五所川原大橋が完成。現在は交通の要所としての役割を分かち合っている。だが、五所川原・木造・鯉ヶ沢・深浦を結ぶ国道101号が、重要な幹線道路であることに変わりはない。大橋に比べ古く狭い乾橋だが、その背負ってきた歴史の重みは、今もなお、西北の生命線たる貫緑を備えている。